

居場所づくりの原動力——子ども・若者と生きる、つくる、考える

見本（本書「はじめに」より抜粋）

はじめに

——フリースクール（オルタナティブスクール）運動から学び引き継ぐもの

高橋寛人

この本で話をしてくれる人たち

かつての日本には、地域に子どもがあふれていました。子どもたちは、原っぱや、河原や、公園や、車の通らない未舗装の砂利道で、日が暮れるまで遊んでいました。また、スーパーが普及する前は、日々の買い物場は近所の八百屋、肉屋、魚屋などで、電気製品や薬屋も町の商店でした。地域には子どもが生活する空間と人間関係が豊富にありました。

しかし、高度成長期、自動車の普及によって、かつて遊び場だった道路は、いまや交通事故で命を失う危険な場所にかわりました。空き地で草野球をやっても、ボールが道路に転がり出てしまうとゲームを中断しなければならなくなったので、やがて野球をしなくなりました。

子どもが安心して集まれる場所がなくなり、子どもの遊び集団は消滅しました。子どもをめぐ
る人間関係は、家族や学校の中に閉じ込められました。こうして、子どもの居場所が地域から
失われていきました。

一九七〇年代半ばから教育荒廃が進行します。一九六八・六九年に改訂された小・中学校学
習指導要領が、中学校の場合、一九七二年から実施されます。それまでと比べて大幅に教育
内容が増えて、授業進度も速くなりました。子どもたちは、毎日学校に通ってまじめに授業
を受けても授業についていくことができず、「落ちこぼれ」が大量に生まれました。しかも
一九七四年には高校進学率が九〇%をこえて、だれもが高校に行く時代になりました。勉強
が嫌いで授業がわからなくても、高校入試という選抜から逃れられない状況に追い込まれまし
た。こうして、一九七〇年代半ば以降、校内暴力、家庭内暴力、非行の嵐が吹き荒れ、いじめ
や不登校が広がります。

不登校の子どもたちは、初めは病気扱いをされて、精神科を受診させられたこともめずらし
くはありません。しかし、病気ではないことが徐々に明らかにになり、一九八〇年代に入ると、
学校に行けない子どもたちの居場所がつくられていきます。いつの間にか、そのような居場所
はフリースペース、あるいはフリースクールと呼ばれるようになりました。一九九二年からは
フリースクールなどの民間の施設で指導等を受ける場合、一定要件を満たすときに小・中学校

で出席扱いとすることができるようになったのです。

本書では、一九七〇年代半ば、あるいは一九八〇年代から、子どもたちの居場所づくりに携わり、現在までそうした場を運営し続けている、子ども・若者の生活・学習援助者たちに、ご自身のライフヒストリーを語っていただき、実践活動を振り返ってもらいました。メンバーは、石井淳一さん、佐藤洋作さん、西野博之さん、奥地圭子さん、柳下換さんの五人です。不登校が異常で、世間から白い目で見られていた頃から、これまでに二〇年以上の間、活動が続けてこられました。日本における不登校の子どもの居場所づくり、フリースペース、オルタナティブスクールのパイオニアです。そこで、本書は貴重な証言の記録集という意義を持ちます。

ところで、本書は市民講座の成果をもとにしています。二〇一〇年秋、横浜市立大学エクステンション講座として「子ども・若者の居場所づくりの今までとこれから」私たち、子ども・若者たちの声を聞き、応え続けてきた」という連続講座を開きました。この講座は、子ども・若者の居場所づくりをしようとする人々を対象にしたものです。

講師をつとめていただいた、奥地圭子さん、佐藤洋作さん、西野博之さんは、柳下さんが地域における学びの場をはじめた頃からの同志です。不登校や居場所づくり関係者の間で非常に有名な人たちです。石井淳一さんは、不登校というよりは、むしろ困難な生活の中で生きる子どもたちとかかわってきました。だれもが今日まで、それぞれの主義主張を貫いて居場所を

続けてきました。

講師の方々には、講座の前半でライフヒストリーを語っていただきました。居場所とはこうあるべきだという話ではなくて、「こんな楽しみがありました」「あんな苦労がありました」と話してもらいました。読者の方々も同じような気持ちになって、「自分ならどうしようか」などと考えながら読み進めていただけたと思います。後半では、柳下さんが講師と対談しています。その中で、これまでの活動の原動力や講師自身の変革などの話を引き出しています。子ども・若者とのかわり方の秘訣や、居場所づくりを長い間続けることができた理由を探っています。

この本には、子どもの居場所づくりの先駆者たちの実践、試行錯誤の中での自己変革、活動の原動力などが、生の言葉で語られています。居場所づくりをしている方、これから始めようとする方々に、これまでの貴重な経験と思想を生かしていただければと思います。

各回のテーマと講師

では次に、本書の内容を紹介します。第一回「社会との関係の中で育つ子どもたち」は、こ

とぶき学童保育指導員の石井淳一さんの話です。横浜市寿町は、かつて山谷、釜ヶ崎とともに日本三大ドヤ街のひとつで、日雇い労働者の町でした。街を歩けば、男ばかりが多いことに気づきます。昼間から酒を飲んでいたり、道路に座ったり寝ころんだりしています。女性が少ないのは昔も今も同じですが、近年、老人が多くなりました。今では高齢化が進んで、かつての労働者たちは生活保護で暮らすようになり、これまで住んでいた簡易宿泊所に続けて住んでいます。寿町の下やならば、宿泊所を住所とすることが出来ますので、身寄りのないお年寄りでも生活できるのです。寿町には、時代時代の日本社会が抱える問題が鋭くあらわれます。石井さんは、そんな寿町を生活の場として育つ子どもたちと長くかわってきました。その経験を話していただき、地域の子どもたちと共に生きることの意味を考えます。

第二回は「市民による協同の力で支える子どもたちの学習権」で、講師はNPO法人文化学習協同ネットワーク代表理事の佐藤洋作さんです。佐藤さんが大学院生時代にはじめて、市民の手による子どもたちの学習支援の形とは、どのようなものだったのでしょうか。そして、時代の変化の中で、子どもたちを生きづらくしている問題の本質も変わってきたのでしょうか。そして、学習すること（生きること）の困難さを抱えた子どもたちに対する支援のしかたはどうあるべきかを考えます。

第三回「地域が持つ包摂力によって支えられる子育て」に登場するのは、NPO法人フリー

スペースたまりばの理事長、西野博之さんです。西野さんは現在、川崎市子ども夢パーク所長もつとめています。子どもや大人が、自分が住む地域で共に支え合って育ち生きることとは、どういった意味を持つのでしょうか。川崎市子ども夢パークは、川崎市が市民からの働きかけによって用意した、地域における子育ての拠点です。行政の中に子育ての拠点を確保していくことの意義について、その困難さも理解した上で、こうした試みの重要性を共有化したいと思います。

第四回「子どもと共に考え、親と子の共同の力で作りだした学びの場」の講師は、NPO法人東京シュール理事長の奥地圭子さんです。奥地さんは東京シュールで有名なので、説明はいらないでしょう。とくに不登校の子どもから強い支持を得て、フリースクール運動を進めてきた点に特徴があります。二〇〇七年には東京シュール葛飾中学校という私立学校を立ち上げました。奥地さんは、不登校は特殊な事態ではなく、学校化された社会においてはどの子にも起こりうることを世の中に広めました。さらに、学ぶことの権利を自ら行使しだした不登校の子どもたちに対して、親の責任として子どもたちの学びの場を創りだしてきた経験を語っていただきます。

第五回は、「教育」のオルタナティブとしての「学び」「再帰運動の意味」です。講師の柳下換さんは、一九八四年に鎌倉地域教育センターをつくって、子どもたちの学習支援をはじめて

から、湘南・風のフォーラムなどを経て、一九九六年に鎌倉・風の学園を創設、翌年にはインターネットによる学習プログラムを立ち上げました。現在は横浜市立大学非常勤講師もつとめています。柳下さんの実践は、不登校の子どもを対象にしたものではありません。柳下さんは、人間にとって本来「学び」は楽しいものなのに、学校教育は本当の学びになっていないため、つまらなくなってしまうという考え方を取ります。そこで、柳下さんの学園では、子どもに真の「学び」を経験させます。こうすると成績も良くなるのですが、成績を良くするために本当の学びをさせるわけではありません。不登校の子どもは「学校に行きたくない」とは言っても、実はだれでもみな本当の学びが大好きです。柳下さんは不登校児のためにフリースペースをつくったわけではありませんが、不登校の子どもたちにとっても、楽しい学びの場になり、居場所になっていきました。

さて、以上に紹介した講師の方々の話には共通性が高いのですが、それぞれ違いもあります。第一回の石井さんのように、元々学生の時にはじめて活動がずっと続いている人もいますし、奥地さんのように、長い間小学校教師をしていた人もいます。柳下さんも、短期間ですが高校や小学校の教師をしていました。地域性もさまざまです。石井さんの場合は、横浜市寿町というドヤ街のためか、ヤンチャな子どもたちが多いようです。佐藤洋作さんの文化学習協同ネットワークは、東京の三鷹市という「文教地区」といったイメージの街で展開されてきました。

川崎にも東京の葛飾にも、それぞれの地域性があります。地域によって環境が違うので活動の内容も異なりますが、それにもかかわらず、本質的に共通する点があるのです。

本講座の講師たちは、一九七〇年代の半ば、あるいは一九八〇年代初めから、生きづらい状況へと追い込まれた子どもたちに寄りそい、共に悩み考え、子どもたちの学ぶ権利や場を保障し、確保するための活動を行ってきました。三〇年にわたるこうした運動をふり返り、行なってきた運動の意味などについて考えます。それをもとに、これからの居場所運動のあり方を探ります。

―― WEB公開用につき中略（本書でお読みください）――

居場所論

さて、つづく「運動」としての子ども・若者の居場所論」では、講演と対論をふまえて、一九八〇年頃から展開してきた居場所づくり運動の意義と思想について、柳下換さんがまとめています。柳下さんが対談で講師たちから「活動をしていく中で、子どもたちとのかかわりが

変革した時期はあるか、それはいつでどのように変わったか」、それを聞き出しています。これこそが、居場所づくりにおいて最も重要なことです。子ども・若者とかかわる上での秘訣なのです。子どもとの関係の変革のためには、大人自身が変わらなければなりません。柳下さんが毎回受講者に質問を投げかけて、休憩時間に答えを考えてもらったのも、受講者に関係性の変革の必要性を感覚的にわかってもらうためです。

これにかかわって柳下さんが強調するのは、「アクチュアル／アクチュアリティ」です。「アクチュアル／アクチュアリティ」とは、停止することなく進行している事象としての現実です。変化する現実には、自身の自律的な活動によって対処する以外にはありません。居場所づくりの活動には、若者にかかわろうとする大人が陥る落とし穴があります。講師の方々もはじめはみなそこにはまりました。しかし、そこからぬけ出しました。ぬけ出すために必要なのは、大人自身が変えることです。第一に子どもとの関係性の変革です。そして第二に、大人自身の考え方の変革です。子どもや若者にかかわるうちに、大人にとっても「学び」が楽しいこと、縛られていた学びではない本当の「学び」に気づくことができます。気づけばますます居場所づくりが楽しくなり、子どもにとってもすばらしい居場所になっていくでしょう。

大人はどのように変わらなければならないのか、「運動」としての子ども・若者の居場所論」をお読みください。

非正規労働と青少年の居場所

ここまで、本書の構成と内容、そして意義を説明しました。次に、子ども・青少年の居場所づくりの歴史を簡単にふり返ってみましょう。そして、現在ますます居場所づくりの重要性が増していることを説明したいと思います。

子どもや若者について、「居場所」という言葉が広く語られるのは不登校問題がきっかけでした。一九八〇年頃から、学校行けない・行かない子どもが増え、いわゆるフリースペース、フリースクールなどができて、そのような子どもたちの居場所となりました。

居場所のない子ども・青少年の問題は、一九五〇年代後半からの「勤労青少年会館」「勤労青少年ホーム」などにさかのぼることができます。高度成長が始まった頃、高校進学率は五〇パーセント程度、地方はとくに低く、多くの人々が中学卒業後に親元を離れて都市部に就職しました。故郷から遠く離れて知らない都会で働く一〇代後半の少年少女には、同世代のつながりが必要でした。ただし、このときは「居場所」という言葉はあまり使われていなかったよう

です。

さて近年、青少年の居場所は別の理由で必要になってきています。従来は、生活保護世帯の子どもが高校を卒業すると生活保護から脱却できました。しかし、近年そうではなくなっています。高卒後に正規社員にならないケースが増えてきたからです。神奈川県の一〇一年の最低賃金は時給八三六円です。一日八時間、一カ月に月二〇日働くと一三万三七六〇円です。この額自体が生活するために低すぎるのですが、問題はさらに先にあります。非正規の場合は有期雇用なので、契約が更新されなければ次の仕事を見つけるまで無収入になります。ですから、非正規労働者の貧困問題は、時給の低さだけでなく、雇用の不安定も深くかわっています。非正規の場合、毎日同じところで働くとは限りません。月々水曜日はファースト・フードの店、木曜日はコンビニ、週末は居酒屋という働き方もめずらしくありません。正社員の場合は、よかれ悪しかれ職場が居場所になります。非正規の場合はそうなりません。高校や専門学校、大学を卒業して非正規で働く若者に、居場所が新たに必要になってきました。

「居場所」とは

ところで、「居場所」とは何でしょうか。私は「存在を肯定される場所」と答えています。子どもはだれでも、思春期を迎えると自立しようとしています。自立するためには、自分自身の価値観を持たなければなりません。自分の価値観を持つためには、それまでの価値観をいったん否定する必要があります。子どもにとってそれまでの価値観とは、親の価値観です。そこで、子どもは親の価値観を否定して、親の言うことを聞かなくなります。親は「なぜ言うことを聞かなくなったのか」と思って子どもの話を聞いても、話の内容に納得できません。子ども自身の価値観がまだできていないからです。親は子どもに「考えが甘い」としかります。しかし、多くの親にとって、自分の子どもはかけがえのない大切なものです。存在自体を肯定しているのです。しかし、一部にそうでない親がいます。子どものためと言いながら、実際は自分のため、自分の見栄のための親がいます。子どものためを考えてしかる親と、実は子どもではなく親自身の見栄や願望のためにしかる親とを、子どもは自覚的には区別できませんが、無意識のうちに感じ取ります。

子どもたちは思春期、不安定のままにチャレンジをして何回か失敗をします。自分のためを考えて自分を支えてくれる人がいると思えば、失敗を恐れずにチャレンジできます。そして

成長します。支えてくれる人、肯定してくれる人がいないと、自分を大切にできず、成長のためのチャレンジがうまくできません。

小学校高学年や中学生の頃、夜中に布団に入って「このまま、もし自分が死んだらどうなるだろうか」と考えたことはないでしょうか。自分が死んでも「心から悲しんでくれる友達がない」、いたとしても「来年四月のクラス替えの時に自分のことを思い出してくれるだろうか」と考えるとおぼつきません。子どもがいろいろな考えをめぐらしても、自分自身が世の中に必要不可欠であるという結論は、理論的には出てきません。ただし、多くの子どもは、親が泣くほど悲しみ、おじいちゃんやおばあちゃんもとても悲しむだろうと思うことができます。つまり、自分が大切にされているという実感を持っているのです。頭のよい子やスポーツが得意な子、特技がある子などは、他にもいろいろと残念がつてくれる人が多いはずです。自分を大切にできるのは、このように他人から大切に思われている、扱われているからです。存在そのものを肯定されているからです。他人から肯定されているから、自分を肯定できるのです。肯定できるから、成長のための努力ができるのです。

貧困化と子どもの居場所

思春期よりもずっと前、幼児の頃から虐待される子どもがいます。虐待を受ければ、自分を大切に思えるはずがありません。自己肯定もできないので、がんばる気もわきません。義務教育なので学校には行きます。学校の教師はこのような子どもを肯定し、励まします。ある程度の効果はありますが、たとえどんなにがんばっても教師に親の代わりはできません。

学校では、子どもひとりひとりに成績をつけなければなりません。教師は、子どもを励ます立場ですが、他方、子どもをある基準で評価します。中学校での成績は、高校の入学者選抜の際の重要資料ですから、教師は残念ながら生徒の選別に荷担させられているのです。もちろん、学校を居場所と感じて、日々楽しく通学している子どもたちは少なくありません。しかし、学校を居場所と感じられない子どもたちもいます。学校の価値観がなじまない子どももいます。学校が居場所であっても、家庭が居場所ではないため、それだけでは足りない子どもたちがいいます。

教育学者の多くは学校教育の研究をしています。近年、学校に限らず、子どもの生育環境に関心を持つようになってきました。「持つようになってきた」というより、「持たざるをえなくなった」と書くべきかもしれません。貧困化が進み、勉強どころか日本の子どもたちの暮ら

しが厳しくなってきたからです。朝食を食べないで学校に来る子どもについては、これまでは生活習慣の問題として論じられてきました。ところがいまでは、お金がなくて朝食を食べられない子ども、さらには夕食も満足にとることができずに、まともな食事は給食だけという子どもが増えてきています。風邪をひいたりけがをしても、病院に行けずに学校の保健室に来る子どもたちもあらわれています。

二〇一〇年度に就学援助を受けている小中学生は全体の一五%、六人に一人にせまっています。今後ますます日本の貧困化が進行することが予想されています。社会福祉に携わる人々の間では、虐待が貧困と結びついていることは常識です。乳幼児や児童の居場所づくりの必要性も高まっています。

居場所と地域

社会や家庭や学校であまり大切にされていない子どもや青少年の自己肯定感を育てるために、だれも排除することなく受け入れる居場所が必要です。だれでも受け入れるという点で、公共空間です。この空間を通じて、子どもや青少年はスタッフとの関係を結び、子ども同士

のつながりをつくる中から、徐々に自己肯定感を形成できます。また、世の中には、子どもや青少年のためのNPOやボランティア組織があります。地域にはさまざまなネットワークがあり、直接子どもや青少年にかかわらなくても、力を貸してくれる人々がいます。居場所を仲立ちとして、地域の中に人やグループの結びつきが生まれ、広がっていきます。つまりこの空間は、地域における人々のつながりの拠点ともなります。人々がさまざまにつながっている地域は、地域全体が青少年の居場所となっていくます。

近年日本では、毎年三万人以上が自殺しています。会社をリストラされて自殺する男性社員が少なくないといわれます。何年もの間、毎日のように長時間会社で働いたために、会社以外に居場所はありません。しかし、他に居場所があれば、自殺しなくてすむのではないのでしょうか。どの年代の人々にも居場所が必要です。子どもや青少年の居場所づくりにかかわることは、自分自身の居場所をつくることでもあります。子ども・青少年の居場所は、特定の子どものみだけのものではなく、世代をこえた地域の人々のネットワークを豊かにする公共空間という可能性をもっているのです。

この本では、子ども・若者の居場所づくりを中心に考えています。しかし、ここで示されていることからは、すべての居場所づくりに共通するものがたくさん含まれています。

『居場所づくりの原動力』 見本

詳細は松籟社サイトをご覧ください。

<http://shoraisha.com/main/book/9784879842992.html>